

- 1 派遣期間 平成23年11月17日(木)～11月18日(金)
- 2 研修先 学校名 秋田県大仙市立横堀小学校
所在地 秋田県大仙市福田字穴沢4番地
学校名 秋田県大仙市立仙北中学校
所在地 秋田県大仙市堀見内字西福嶋29

3 研修内容

平成22・23年度 国立教育政策研究所指定
地域等の課題に応じた教育課程研究事業「小・中連携教育実践研究」公開研究会・講演会
～ 実践研究課題 ～「小学校外国語活動及び外国語科を軸とした小・中連携の在り方」

◎ 実践研究のねらい

伝え合う楽しさや分かり合える喜びを感じながら豊かに表現し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童生徒の育成。

(1) 公開授業参観

①小学校2年生：単元名「ジャンプZOOへようこそ」

本活動では、動物を表す英語表現についてチャンツやゲームを通して慣れ親しむ活動を行っていた。Activityでは、視覚のみに頼らず動作化を交え体いっばいに表現することを楽しむ子どもたちの姿があった。(ジェスチャーゲーム後にActivityは行われていた。)

指導については、次の5点について焦点をあてて本単元は構成されていた。

【言語や文化についての体験的な理解】 ※チャンツ：詩、詠唱、単調な話しぶり。

チャンツを行う前に担任と学校支援ボランティアが意図的に本時で使用する重要語句を取り入れた寸劇を巧みに仕掛け、児童の発言を引き出していく。正に、低学年学習の醍醐味である。児童は、“What～?”を本時の英語表現であると確認する。また、学習の各所に児童が推測する場面が設定されていることも児童の知的好奇心をくすぐる。

【積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成】

- ・問かけ表現“What animal(s)?とともに、困ったときの表現” Help please. “を促す。
- ・発表の際には、clear voice や声の大きさを意識させるとともに、ジェスチャーもコミュニケーション手段として大切であることを感じ取らせる。

【外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる】

英語特有の音の響きやリズムを楽しみながら親しむ。表情やジェスチャーも加えて表現することを促す。英語表現については、2年生という発達段階を考慮して短い聞き方を使用したり類似表現を連続したりする。(例1：“What animal(s) is (are) this (they)?” → “What animal(s)?”) (例2：“What color?” — “What ○○?”)

【5・6年生外国語活動との関わりについて】 *既習体験を生かす。

- ・2年生“What animal(s)?” → 5年生“What is this?” (類似英語表現の継投。)
- ・2年生「ジャンプZOOへようこそ」 → 6年生「行ってみたい国」(動物から連想する。)

【地域人材の活用について】

- ・1～4年生(外国語活動は年間5時間)は、地域ボランティアとともにTT授業実施。
- ・5・6年生は、CIR(国際交流員)やALTとのTT授業。(地域ボランティアも有り。)

②小学校6年生：「おすすめ旅行をPRしよう」

本活動は、世界の様々な国のよさを知り、理由を含めて行ってみたい国を伝え合ったり、その国の魅力をPRしたりすることをねらいとする。単元構成は、“I want to go to ～”の基本表現を元に行ってみたい国を紹介し、そこで食べたいもの(eat)や見たいもの(see), やりたいこと(play, try)などを伝え合う活動が核となる。(※“I want to eat ～.”)

指導についての焦点は、2年生の学習と系統性を保っている。

《小・中連携について》

外国語活動として、中学校英語教諭とのTTを実施。中学校教諭がコミュニケーションの達人として児童の手本となることで、英語教育への必要感だけでなく中学校教育への意欲付けとなる交流となっていた。以下は、本授業の単元計画表の一部である。

単元計画（5時間）

時	1 ワールドカップで広がる世界	2 英語でつながる世界	3 行ってみたい国リサーチ	4 行ってみたい国ランキング（本時）	5 コマーシャルを届けよう
	（※各時間のねらいが書かれている。）				
主な活動	* 国旗をもとに、サッカー女子ワールドカップの出場国当てクイズをする。	《国際教養大学の留学生と交流》 * 国旗や地図上の位置から母国を当てる。	《仙北中学校との交流》 * 中学校の先輩の外国での体験スピーチから紹介の仕方を知る。（VTR）	《仙北中学校・高梨小学校との交流》 * 両校のランキング結果を知り比較する。	《仙北中学校・高梨小学校との交流》 * コマーシャルはVTRに撮影し両校に届ける。両校の児童生徒の投票でコマーシャル大賞を決める。
表現	I want to go to～.	Where are you from ?	I like ～.		

③ 中学校1年生：「Unit 7 カナダの学校」（東京書籍）

本単元は、日本の中学生が、カナダの中学生ビルとテレビ電話での対話を通して、カナダの学校生活について知るという場面設定である。活動中、小学校で学んだ「時刻」などが生かされるとともに、正確な文構造やその他の表現についても学びを広げる。指導については、小学校との系統性が図られ、中学生の視点から興味を促し理解を深める構成となっている。

本時（7/8）では、外国人留学生に出身国の中学校生活についてのインタビューを展開した。《小・中連携について》

本時では、伝え合う内容が生徒にとって価値あるものに位置づけ積極的に活動できるよう意図的に構成されていた。活動の手立てとして、小学校で学んだことが生かされた点が生徒の学びの大きなパイプとなっていた。英語表現も音声から表記へと見事に変容させている。

また、英語関係者のみでなく広い人材活用も見逃せない。留学生との交流の際活用する地図説明において社会科教員2名が表情たっぷりに英語でサポートした。（他教科教員とのTT）

（2）講演会（講師：国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官 直山 木綿子 氏）

演題「外国語教育における小・中連携～外国語活動と中学校英語科をつなぐ～」

4 感想

本研究は、表立った研究内容表現にはないが、子どもに「勇気」を与える取り組みである。いずれの学年も授業開始（挨拶）後に、必ず、「本時への取り組みの心得」を表明化し提示し、本時のチャンツへと移行する。それは指導案には表記されていない。常に、この両校に流れる学習スタイルなのであろう。こういった日常の小さな積み重ねが、学級経営に、授業経営に生きてくる。どの授業においても、Warm up と繰り返しの効果は欠かせない存在であるからだ。

学年が低い段階ほど学習内容を推測する体験活動や仕掛けが多く設定されていることも特徴的だ。学年が上がるにつれて、具体的操作期から抽象的操作期へと移行する学びに応じたより正確で具体的な表現へと学習到達目標が高くなる。これは、各学年の発達段階を踏まえたものであり、教科・領域を問わず子どもの日常生活に欠かせない学びである。ここに子どもの成長を願い丁寧にその成長を見守ろうとする大人たちの子どもたちに対する真摯な態度が窺えた。

チャンツや学習活動中の各コーナーにおいて、その区切りと目的が明解となるための如く、適材適所な人材が登場するのも魅力的である。時におどけて失敗の見本となり、一方で子どもたちが憧れるほど完璧な姿を披露する教師。英語の授業で社会科の先生が登場し、心もとない発音で思い切り表現しあう姿に、子どもたちは勇気を得た。また、小学校の授業に中学生が参加したりその逆を行ったりすることで、「自分の学習はこれでいいのだ。」という自信をつけた。子どものニーズは、身近なところにその選択肢が豊富に存在し、学びの可能性を広げていた。

本研究において何より素晴らしいのは、子どもたちの表現する喜びが9年間一貫して途切れないことである。ここには、学びの連続性として系統的で骨太な計画があるからだ実感した。綿密な教師間の協働性と発想の柔軟さが小・中連携を支え、子どもたちは、この温もりに応えるように伸びやかに表現していた。人は、動機付けが明確となった時、明るく活発に行動する。自尊感情も高まる。その芯となるのは、「何度でもチャレンジしていい。」という大らかさであろう。ここに小中の垣根を越えるヒントが潜んでいる。本研究がそう教えてくれているのだ。